

エスニックマイノリティの研究動向について

土 屋 智 子

はじめに

アメリカ社会にとって移民の「同化」は常に重要な意義を持ってきた。建国以来多様な人々が「アメリカ人」となってきたアメリカ国家、社会にとって「誰がどのようにアメリカ人となるのか」ということは大きな関心事であった。そのため、例えば、社会学、文化人類学、文学、歴史学などの主な学問領域は、多様な文化を持つ人々が「アメリカ人」となる様相が議論される場でもあった。このような関心が高まったのはアメリカ社会に移民が多く押し寄せた 19 世紀末から 20 世紀にかけてであろう。社会学の分野では、1890 年にシカゴ大学で設立された社会学部が 20 世紀を通じて移民がアメリカ社会へ同化する過程についての調査を行い、ロバート・パークという社会学の権威を創出してシカゴ学派が興隆した。1893 年には歴史家、フレデリック・ジャクソン・ターナーが「アメリカ史におけるフロンティアの意義」を発表し、大きな影響力を持って人々にアメリカとは何かを想起させた。本稿では、アメリカにおける学問分野、特に社会学とエスニックスタディーズに着目し、これらの学問分野が 20 世紀以降、アメリカの移民法や国際関係と共にどのような変遷を遂げているのかを論じる。

1. 社会学における主な同化理論について

まずアメリカの学問分野において移民のアメリカ化のプロセスに関しどのような同化理論が形成されたのか簡単に振り返ってみよう。主に挙げら

れるのが、「アングロコンフォーミティ」と「るつぽ理論」と呼ばれるものである。一つ目の「アングロコンフォーミティ」は「人々はアメリカ建国以来あるイギリスの価値観が存在する主流社会に順応する」という考え方で、アメリカ「主流社会」は WASP (White Anglo-Saxon Protestant) 的であると想起された。この理論は次第にイギリス文化に適応できないものが排除されていると理解されるようになった。次に登場した「るつぽ理論」は「様々な人種や文化が溶けて混ざり合い新しくアメリカ人になる」という考え方であった。これはアメリカに元来あるイギリス的な価値観への同化ではなく、様々な人種や文化が溶けて混ざり合い新しい価値観が創造されるという考えがあった。明石紀雄と飯野正子氏によると、元々、「るつぽ」という言葉は、イギリス生まれのユダヤ人作家であるイスラエル・ザングウィルの戯曲「るつぽ」(The Melting Pot, 1908 年)が影響を及ぼしたが、「溶けて混ざり合い新しくアメリカ人になる」という考え方には曖昧さがあり、どの出自の移民でも、どの人種集団に属する人々でも、そしてどの文化を持った人々であっても、「融合する」とは具体的にどのような状態になることなのであろうかという疑問が呈されるようになったと説明している。

この後、ユダヤ系の哲学者ホレース・カレン (1882 年–1974 年) による文化多元主義の考えが説かれた。この理論は、移民はアメリカ主流社会に同化するために自分たちの生活様式や独自の文化を変える必要に迫られたとしても、それらを完全になくしてしまうのではなく、取捨選択して残す、というものであった。彼はこのような同化理論を「オーケストラ」に例えた。カレンは移民の持つ独自の文化をそれぞれの楽器に見立て、どの楽器の音色も必要かつ重要な役割を果たすこと、そしてそれらは調和することを提起した。この理論は先に述べた2つの同化理論、アングロ・コンフォーミティやるつぽ理論、のように、移民が独自に持っている生活様式や文化を、「アメリカ主流社会に存在するアングロサクソン文化」へ「融合」する際にそぎ落とされるもの、溶けてなくなるもの、と捉えるのではなく、む

しろ調和のとれた旋律を奏でるアメリカ社会においては必要不可欠なもの、と捉える傾向があったと言ってよいだろう。

同じように、多様な人種、文化がアメリカ社会を構成する、と考えて同化理論を提唱した社会学者、ランドルフ・ボーンはアメリカ社会を「トランスナショナル」という概念で説明した。すなわち、移民がアメリカに持ち込む生活様式や多様な文化が存在するアメリカはそれ自体がどこの国にも見られなかった様相をしているということ、そしてそれは未来に切り開かれているという意味を持っていた。特にヨーロッパと比較し、アメリカは強固な国を目指し多くの文化を持った人々が平和に共存する社会こそがアメリカ社会であると提唱した。そしてアメリカ社会を形成する人々を世界市民と捉えた。

アメリカ社会を「オーケストラ」や「トランスナショナル」といった協調的民主主義の概念で捉える理論が登場したことは、当時のアメリカが置かれていた国際情勢を考慮する必要があるだろう。これらの理論が出現した1950年代は、第二次世界大戦が終わりを迎え、冷戦に突入した時代であった。対ソビエト連邦という社会情勢の中、アメリカは社会主義に対抗して「われわれの民主主義」が正義であること、そしてそれは世界の他の国々にも有益であることを示したいという思惑があった。そのような情勢の中で、アメリカ社会を「オーケストラ」や「トランスナショナル」といった概念で捉えることは、国際社会に、アメリカ社会を、国境を超えて調和を達成した社会として想起させ、冷戦中のアメリカ国家理論として意義を持ったと言えよう。

アメリカ民主主義を世界的正義として捉えるかのような同化理論は冷戦という時代の中で一定の効力を持ったが、アメリカ社会の中に実際に存在するジムクロウ法、その法の制約を受けて生きる各エスニック集団、長らくアメリカに存在する黒人への差別などを直視した社会学者からは全く別の「アメリカ社会」が提示されたことも挙げておく必要がある。例えば、ニューヨーク市の新移民と呼ばれたエスニック集団と黒人の生活状況を調

査したネイサン・グレーザーとダニエル・モイニハンは1963年に発表した『人種のるつぼを超えて』において、黒人が依然としてアメリカ社会へ溶けあっていないこと、そしてプエルトリコ系の移民においては黒人よりも社会的上昇が遅いことを指摘した。

これらの同化理論が作られた時代を広い視野を持って見ておく必要がある。先に述べたように19世紀から20世紀にかけて大量の移民がアメリカに押し寄せた頃、アメリカ人とは誰かという同化理論が多く作られ始めた。しかし1924年に移民の入国が制限されるようになると、移民の同化に関する理論は人の移動や動きに関することではなくなり、移民の持つ独自の文化や慣習は根絶や忘却の対象となった。1924年の移民法では、1890年の国勢調査における出身国別人口の2%を入国の対象とした。これは、西欧及び北欧の出身者の多かった1890年の人口割合を使用することで、西欧、北欧の多い人口構成を保とうとするものだった。アジアからの移民に帰化権を認めた1952年の移民國籍法、マッカーラン・ウォルター法、及び出身国割り当て制限を撤廃した1965年のハート・セラー法により、特にアジア系の移民の移住が再開されるようになるまでアメリカにおける同化理論は国内のWASPを中心とした価値観を基軸とする同化理論の色合いが濃かったと言えるだろう。

2. 社会学から派生して：エスニックスタディーズの意義

エスニック・スタディーズという分野は公民権運動の高まりと共に1960年ごろ「移民」同化論に対抗する形で出現した。それまでアメリカの学問領域で積極的に産出された同化理論とは異なり、エスニックマイノリティの視点から「自分たち自身の歴史を語る、作る」ことに重きが置かれた。もちろん公民権運動の後でさえマイノリティの人々が大学高等教育の知を形成する機会が多くあったわけではない。しかし、「他者」として、主流社会に同化する人種集団として「語られる」「想起される」のではなく、マイノリティという立場、視点を重視して、移民自身の声を持つことに意義を

見出し、エスニックスタディーズという学問分野が成立した。また、大学の組織編成によって、エスニックグループごと、例えば、アジア系アメリカ人研究 (Asian American Studies)、アフリカ系アメリカ人研究 (African American Studies)、ヒスパニック系アメリカ人を研究するラティーノ研究 (Latino Studies / Hispanic Studies)、先住民研究 (Indian Studies / Indigenous Studies) などに細分化されている。さらに、1965 年の移民法改正によりベトナム、カンボジア、インドネシアなど東南アジアからの移民が増加すると、東南アジア研究 (Southeast Asian Studies) が盛んになった。近年、インドやパキスタンなど南アジアからの移民が増加し、南アジア研究 (South Asian Studies) が設立されている¹⁾。

ここではアメリカに移住したアジア系アメリカ人がどのような学問形態を構築したのか例を挙げてみたい。例えば、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のアジア系アメリカ人研究センターを設立した日系アメリカ人のユウジ・イチオカは、日系アメリカ人の歴史の可視化に大きく貢献した。国内における日系アメリカ人という立場を重視して、主流の学問では忘却や湾曲の対象となりがちであった日系アメリカ人に対する強制収容に関する事柄を含めた歴史を記した。イチオカは 1988 年に出版した *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants 1885–1924* と題したことからも分かるように、日本からアメリカへ渡った初代を「一世」と呼び世代を大切にする日本のコミュニティの価値観を前面に表出させた。カリフォルニア大学バークレー校のアジア系アメリカ人研究に長く従事したロナルド・タカキは、1984 年に『バウ・ハナ——ハワイ移民の社会史』や 1989 年に『もう一つのアメリカン・ドリーム——アジア系アメリカ人の挑戦』そして 1993 年に『多文化社会アメリカの歴史——別の鏡に映して』を出版した。タカキは日系アメリカ人として、またアジア系アメリカ人としての立場からアメリカの人種関係や多様性について記述した。アメリカ社会におけるマイノリティとしての立場を尊重して記述されたアメリカ社会、文化、人種関係は、それまでアメリカ主流の学問分野で語られてきたアメ

リカ社会、文化、人種関係とは違い、マイノリティの存在、社会、文化を問題視するのではなく、主流社会の構造や思想への問題点に目が向けられ、学術分野へ新しい視点を提示した。

これらのマイノリティの立場を重視した視点からアメリカを読み解く姿勢はアメリカの学問分野へ批判的かつ新しい研究枠組みをもたらしただという点で大きく貢献したことは言うまでもない。しかし、批判点もあった。それは第一に、白人の男性性が重んじられるアメリカ社会においてアジア系男性は女性化される傾向にあったため、それに対する抵抗としてアジア系アメリカ人史は男性の労働史という面が強調された。また男性の労働史という側面が強調されたのには他のマイノリティグループとの連帯を図ることが出来るという側面もあった。また、彼らは、アジア系アメリカ人の歴史は主流として扱われていないことに対して、より可視化を求める傾向にあった。アジア系アメリカ人研究では、彼らの歴史、社会、文化はしばしば“Untold history,” “hidden past,” “buried stories,” というような言葉で語られ、主流社会の中で「アジア系アメリカ人や文化はゆがめられてきた、正しく理解されてこなかった」と主張する傾向にあった。国内のマイノリティの立場、視点を持ったアジア系アメリカ人としての語りが形作られる一方で、それらは主流社会との違いを強調することにもなった。文化絶対主義 (cultural essentialism) が冗長される傾向があったとも言えよう。また、いわゆる「これまで語られてきた主流のアメリカ史、社会、文化」では「埋もれていた、欠けていた歴史の発掘」という、史実の追加 (“additive history”) のような側面が強く、それらが主流社会で形成される「知」を揺るがす力をそれほど持ったわけではなかったことを指摘しておきたい。

3. クリティカル・エスニックスタディーズの試み

上記で述べたように、1960年代以降、エスニックスタディーズの分野で形作られたアジア系アメリカ人史、社会、文化の認識は、アメリカで生まれ育ちアメリカ人として生きる中で、アメリカ主流社会に対し「違った見

方」を提示したものの「アメリカ国家に貢献する人々」というナショナルな領域に収まる傾向があった。

国内の文脈に収まりがちなアジア系アメリカ人研究およびアジア系移民史に対し、アジア系移民の研究はアメリカの帝国主義とグローバル化する経済を中心に据えてなされる必要があるという声がある。アジア系アメリカ人研究に従事するリサ・ロウはアメリカの大学の学問分野は、アメリカ国家のために知を産出する国家装置と捉え、アメリカにおけるアジアやアジア人に関する知識はアメリカの軍事主義やアジアへの経済拡大を助長してきた、と主張する。ロウによると、「1850年代から第二次世界大戦まではアメリカにきたアジア系移民は、国家の経済と政治国家の矛盾を、第二次世界大戦以降は国民国家とグローバル経済の間に生じる矛盾を解決する場となった」と説明する。² 同様に、アジア系アメリカ人研究に従事するイェン・エスピリツもアジア系アメリカ人移民の研究はトランスナショナルな領域でなされる必要性があることを提唱している。エスピリツは、アメリカが「移民の国」として定義される際、自由、平等、正義はアメリカのものであり、アメリカへ来る移民は貧しく、墮落した祖国からこれらを手に入れるためやってくるという物語に押し込められてしまうと述べる。そして、移民はアメリカ国内に存在する成功の機会を求めてやってくるのだ、という語りで理解される時、アメリカが長く施行していた移民排斥法や奴隷制のことは語りに表れない、と言う。³ この見解は大変意義深いもので、特に20世紀に入ってアメリカへ来た移民について再考させられる。エスピリツも、エスニックスタディーズ研究がマイノリティの立場を尊重することに逸れることはなく、その上で、するどくアメリカ帝国が世界の覇権を取るため先にアジア諸国へやってきたのだと主張する。そこには、アメリカへ来る移民は祖国が貧しくて豊かなアメリカへ来たかった人々ばかりではない、ということ。そして、アメリカの経済体制、軍事体制、政治体制をアジア諸国へ持ち込みにやってきて貧富の差を作り出したのはすべてアメリカ帝国だ、と唱えている。この主張は、従来のエスニックスタ

ディーズが、国内のアジア系アメリカ人を可視化させることに目を向けていたために、結局、「アメリカは移民の国であり、常に約束される地にやって来たのであれば、アジア系アメリカ人も二級市民ではなく一級市民として扱ってほしい」という理解に飲みこまれるところから抜け出し、新たな理解を提示したと言ってよいだろう。エスピリッツは、アメリカへやってきた移民は植民地化や併合、そして奴隷制によって無理やりアメリカ国家に取り込まれた人々だと提唱し、従来の言わば「アメリカンドリーム」の言説が神話であると説く。⁴

ここで、イェン・エスピリッツが、近年の移民研究に有用であると提唱するクリティカル・トランスナショナルパースペクティブ (critical transnational perspective) の概念を紹介したい。⁵ この概念は、従来のエスニクスタディーズが単純な同化理論からは脱したもの、移民が常にアメリカを中心にアメリカ人になる過程に着目する姿勢から完全に脱していないことを批判する。すなわち、移民が祖国を離れ、アメリカにやってきて、アメリカ人になるという一連のプロセスを想起させる知ばかりが産出され続けることへ疑問を呈し、移民が国境を行ったり来たりすること、そして社会的ネットワークやコミュニティは国境を超えて作られ続けることを強調する。また、エスピリッツが使う「トランスナショナル」という概念は移民の社会的、文化的、経済的、政治的な日常生活空間が必ずしも国家の境界線と一致しないことを際立たせる。そして、今日世界的に存在する地理的な不平等性はグローバル化の過程の中で創り出され維持されていると唱える。

また、クリティカル・トランスナショナル・パースペクティブは、グローバル化による経済的、政治的、社会的の不均衡が自然に発生したものとして扱うのではなく、それらをまさに作りだしているのがグローバル化だと捉えている。植民地化、脱植民地化、そして資本主義がもたらすグローバル化が第一世界と第三世界の境界をあいまいにしていまいがちだが、そこにある不均衡に目を向ける必要性を説き、資本主義を基盤にした経済システ

ムのグローバル化が第三世界へ介入するとき社会及び経済構造の不平等性を産出し、移住を引き起こすと説明する。⁶ このような視点を持ち、グローバル化によって作り出される社会構造の不平等性の中でアジア系移民やアジア系アメリカ人の生活を考えると、おのずとアメリカは「移民の国」という安易な言説に陥ることはなくなるであろう。

エスピリツはこのような視点を持ってカリフォルニアに住むフィリピン系アメリカ人について *Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries* という本にまとめている。そして「フィリピン、南ベトナム、韓国、カンボジア、ラオスからの移民はアメリカの植民地主義、戦争、そしてネオコロニアルな植民地主義に影響を受けた国々からやってきた移民である」と述べている。⁷ つまり、「近年の人のアメリカへの移動と帝国主義はどちらもグローバル化がもたらすものであり、アジアから人々がアメリカへ移住することは帝国の中心へアジア系移民を帰すこととして理解できる」と説明する。このような視点でアジア系移民を捉えると、従来のアジア系アメリカ人研究とは違った点がよく見えるようになるであろう。すなわち、アジアからの移民のアメリカにおけるマイノリティとしての人種化は、彼らがアメリカに来る以前に、アメリカの経済、社会、文化的影響をすでに祖国で受けながら始まっていたことが分かる。

最後に、もう一つエスピリツの提唱する、アジア系アメリカ人研究が留意すべき研究枠組みについて述べたい。マイノリティという立場を主張するあまり、主流研究分野および従来のエスニックスタディーズでさえも、アジア系アメリカ人の主流文化への同化という研究枠組みから抜け出すことは出来なかった。この場合、マイノリティの人々はアメリカ主流社会から「排斥されている」「差別されている」という結論が導き出されることが多かった。しかし、クリティカル・トランスナショナル・パースペクティブと持ってアメリカ国家、社会、文化を捉えると、アジア系アメリカ人は“differentially included”（「違って内包されている、差異化」）されていると読み替えることが出来る。そしてこのような視点を持つと、アジア系アメ

リカ人がアメリカ国家、社会、文化に取り入れられることは、移民は彼らの祖国では手に入らないアメリカの自由、平等、豊かさといったものを求めてアメリカ社会にやってきた、という理解ではなく、戦争、植民地主義、グローバルに拡大する資本主義によって強制的に国家に組み込まれている人々、という理解が可能になる。非常にラディカルな主張とも取れるが、何によって差異化されているのか、を問うことは大切なことであると考え

おわりに

本稿は、アメリカの学問領域における人種のおよび文化的マイノリティの人々がどのように研究されてきたのかについて述べた。世紀転換期から公民権運動によってエスニックスタディーズ研究が学問として成立するまでは、同化理論が主流であった。公民権運動の後、エスニックスタディーズの重要性が増すと、マイノリティの視点や声を尊重して、これまで語られてきたアメリカ国家、社会、文化が語られるようになった。この動きは非常に重要ではあったが、結局アメリカ国家内での可視化にとどまる傾向があった。近年のエスニックスタディーズ研究に従事する研究者の中から、マイノリティの人々は常にアメリカ国家に救済を求めてやってくるわけではないこと、むしろ、アメリカ国家、社会に差異化されて内包されることはある種の暴力的なものとして捉えられるとの指摘について述べた。アメリカンドリームと言説で想起されるような、アメリカは「移民の国」という思想に抵抗し、戦争、植民地主義、グローバルに拡大する資本主義といった人を移住させる政治的、経済的要因に目を向けることの重要性を主張した。

最後に、すべての人種のおよび文化的マイノリティ研究の動向を追うことは難しく、例が日系アメリカ人やアジア系アメリカ人の例にとどまっていることを挙げておきたい。他の人種、文化を持つマイノリティ研究の動向を含めた考察については今後の課題とさせていただきたい。

註

1 例を挙げると、カリフォルニア大学バークレー校は1960年に東南アジア研究が設立し、1969年には南アジア研究と共に成立したが、1990年にはそれぞれが独立して組織された。カリフォルニア大学ロサンゼルス校では1990年に東南アジア研究所が設立されている。

2 “Epistemological Shifts: National Ontology and the New Asian Immigrants.” In *Orientations; Mapping Studies in the Asian Diaspora*. eds. Kandice Chuh and Karen Shimakawa. NC: Duke University Press, 2001, 268.

3 *Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries*. California: University of California Press, 2003, 2.

4 Ibid, 5–6.

「アメリカン・ドリーム」とは、アメリカは機会の均等に恵まれ、経済的成功は自己の努力で達成され得るとする言説。この言説には、アメリカに來た移民も努力すれば経済的成功を達成できるという含みがある。

5 トランスナショナルという概念は1916年にすでにランドルフ・ボーンが「トランスナショナルアメリカ」に於いて、アメリカ国家は移民がアメリカと祖国の間を自由に行き來することを受容すべきであるとの見解を示している。

6 *Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries*. California: University of California Press, 2003, 5.

7 Ibid, 5.